

## 記憶の軽度障害がアルツハイマー病の危険因子に

〔シカゴ〕ライニッシェ・フリートリッヒ・ウイルヘルム大学（独ボン）のFrank Jessen 博士らは「主観的記憶の障害，あるいは記憶の軽度障害は，認知障害や認知症の進行を予測する指標となるようだ」とArchives of General Psychiatry (2010 ; 67 : 414-422) に発表した。

### 記憶能低下への懸念を調査

軽度の認知障害患者は，認知機能検査の結果が正常範囲内であっても，通常の日常生活が営める。このような状態は，アルツハイマー病（AD）や他の認知症の危険因子とされ，毎年10 ～ 20 % が軽度認知障害から認知症に進行すると考えられている。

Jessen 博士によると，軽度認知障害をAD の前段階と捉える概念は，軽度認知障害患者におけるAD の存在を検討したこれまでの研究から証明されている。しかし，AD に伴う脳内の病理学的変化は，軽度認知障害の発症よりも数年前に生じているという。

同博士は今回，「ドイツのプライマリケア患者を対象とした加齢・認知能・認知症研究（German Study on Aging, Cognition and Dementia in Primary Care Patients）」に参加した試験開始時に認知障害のない75 歳以上の2,415 例について調べた。

被験者には記憶能が低下したとと思っているかどうか，彼らがそれを懸念しているかどうかを質問した（記憶障害の重症度を判断するための方法の1 つ）。また1年半後，3年後に軽度認知障害や認知症のテストを行った。

### 懸念を伴うとリスク倍増

その結果，試験開始時に軽度記憶障害があり，それを懸念していた患者では，その後のフォローアップ中にアルツハイマー型認知症や他の認知症を発症するリスクが最も高かった。

Jessen 博士は「主観的記憶に障害はあるが懸念していなかった患者では，認知症リスクは増加していなかった。しかし，主観的記憶障害に関連した懸念が存在するとほぼ倍増した」と述べている。

さらに、試験開始時に記憶障害があった患者と1年半後に軽度の認知障害があった患者では、3年半後の時点でアルツハイマー型認知症や他の認知症を発症するリスクが上昇しており、このような患者で認知症の発症リスクが最も高かった。

同博士らは「認知症を発症した患者全員が、前段階の軽度認知障害の時点で主観的な記憶障害を経験あるいは報告していたわけではなかった」と述べる一方で、「今回の知見に基づけば、認知障害のない患者において、神経心理学的テストの結果からも主観的記憶の障害が明らかな場合、認知症リスクを告知することで、診断手順に関する個人の意思決定や、ADの危険因子を軽減するための介入を行えるかもしれない」と結論している。

【Medical Tribune 2010年9月16日号p46】

## 私の感想

私がかつて調査したデータでは、「初期アルツハイマー病患者においては、病識が欠如しているのは約半数で、残りの半数は物忘れで悩んでいる」という結果が得られています。

すなわち、主観的に記憶の障害を感じていても「懸念するな！」ということのようです。懸念を控えましょうと指導することで、アルツハイマー病への進展を軽減することができるかも知れないわけですね。